

緒方惟準による解剖学講義ノートについて

島田 和幸

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 神経病学講座 人体構造解剖学分野

緒方惟準は緒方洪庵の次男として天保十四年（1843）に生まれ、名を準、蘭州と号した。加賀の渡辺卯三郎の門人となり漢学と蘭学を学び、さらに長崎において伊藤慎蔵につき蘭医学を修めた。安政五年（1858）長崎で、ボンペ、ボードイン、マンズフェルト、およびハラタマなどから当時最先端の蘭医学を学び、文久三年（1863）父洪庵の死去後は、西洋医学所教授にも任ぜられている。慶応元年（1865）にはオランダに留学して、明治元年（1868）帰国後には、医学所取締に任ぜられ、明治二年（1869）には大坂表病院御用となり、明治三年（1870）から軍事病院を兼務しながら明治二十年（1887）に至るまで在任している。この間の明治四年（1871）には陸軍軍医となり、明治六年（1873）には陸軍一等軍医正に昇進している。本書の始めに陸軍一等軍医正と記されているのでおそらくその頃に緒方が解剖学の講義を大坂表病院又は軍事病院で行い、その講義録が今回のこの『解剖学』ノートであると考えられる。次に解剖学講義ノートの記載内容について述べる。本書の外形は縦×横177×125mmの小冊子である。このノートの始めには目次等の記載はない。記載構成順としては、骨論12丁、筋肉論12丁、脈管系統14丁、神経系統7丁、内臓22丁の計67丁から構成されていて、この中にはまったく解剖図は含まれていない。骨論としては頭部の骨に始まり、次いで体幹骨、骨盤を構成する骨、そして上、下肢骨についてそれぞれの形態が述べられている。筋学についてはまず頭部の頸部の筋、背面の浅、深筋、背部での直立に関する筋、胸部における肋骨と関係する筋、上肢については上腕、前腕そして下肢については大腿に始まり足の先端に至るまでの筋名、およびそれぞれの各筋の作用について述べているが、その中でも特に機能に重要と考えられる筋以外は単に筋名の列記で終わっている。おそらく、各筋に関しての詳細については講義時に述べていたのではないかと考えている。脈管系統としては、心臓から出た血管がそれぞれ各部位に分布する基の動脈である右外喉頭動脈、右内喉頭動脈、左喉頭動脈、左鎖骨下動脈、下行大動脈について説明されている。静脈系に関しても動脈と同様で上行大静脈、内喉頭静脈、外喉頭静脈、鎖骨下静脈、腋下静脈とそれらの細枝についての説明が記載されている。脈管系の最後としては水脈（リンパ系）についてである。神経系の項では脳神経、脊髄神経など末梢神経の記載に重点がおかれていて、中枢神経についての記載はほとんどみられない。そして最後の項は内臓学であり、その記載順としてまず聴器、視器、嗅器、味器、皮膚感覚器と現在での感覚器系が内臓器の中での最初に説明記載されていて、その次に呼吸発声器、そして最後に消化器（消食器）系器官として口から始まり咽頭、胃、腸、肝臓、脾臓、等の各臓器に関する説明が述べられている。そして内臓の最後は泌尿生殖器系として腎、副腎、膀胱そして男女生殖器の説明が記載されている。緒方惟準はボンペ、マンズフェルトなどから解剖学教育をおそらく受けていることが考えられるので彼自身はボンペやマンズフェルトが行った解剖学教育に近い教育を行っていたのではないかと推察できる。また自分の学生時代の講義ノートも参考として講義を行っていたとも考えられる。本文中には布列私解剖書と云う書名も記入していることからおそらくオランダ語に翻訳された蘭書解剖書などあるいは参考書として使用していたのではないかと推察されるが、現在までの時点では緒方はどの様な解剖学書を原本として翻譯本として講義していたのかについての詳細は不明である。解剖学を専門としていない緒方惟準が解剖学の講義を行っていたその講義ノートが現在まで存在していることがむしろ興味ある点でもある。